
雪のツバサ

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪のツバサ

【Nコード】

N4553F

【作者名】

クロフォード

【あらすじ】

これまた珍しく雪が江戸に積もった今日。万事屋ファミリーは久しぶりに出掛けることに。雪にはしゃぐ神楽。そこにフツと現れたのは沖田だった。

（前書き）

題名の雪のツバサは……まあ、暖かい感じを出してみました。
red balloonさんに対して侮辱！とか言われそうで怖いんですが……。
どうぞよろしくお願いします！

突然だが、この世界の中心となるターミナルがあり、昔と違い大都市と化した江戸では、雪が降るのは珍しい。

しかし、今日は何年ぶりだろうか。

江戸に雪が降り注いだ。

もう5センチくらい積もっている。

おそらく、皆が寝静まったところに降り始めたのだろう。

万事屋では、新八や神楽が騒ぐ。

「わあ！ 雪アル！ アハッ！」

「アハハ！ 銀さん雪ですよ！ 雪！ 積もってますよ！」

「雪ぐらいで騒ぐんじゃねーよ おまつ これテメーらが大声出すから深爪しちゃったじゃねーか どうしてくれんだよ これ」

銀時は、椅子に乗り、机に足を乗せ爪を切っている。

「でも銀さん！雪なんてもう何年も降ってなかったじゃないですか！ そりゃ 騒ぎはしますよ！」

「ゆゝきや コンコン あゝられゝや コンコン 降っては降っては まだふゝりやゝまぬ！ うっほほゝい！雪アル！始めての雪ア

ル！」

「あれ？ 神楽ちゃん 雪始めてなの？」

「私達の住んでいた街では降ってなかったアル！」

「ヘエ……僕が雪を見たのはもう十年ぐらい前かな 今日が2度目だよ」

「俺がまだハナタレ小僧のころは 冬は毎年雪が降ってたな うん 毎日のように降ってたね」

「で 天人が来て ターミナルが建って 文化が急速に進んで 空気が汚れて 雪も太陽も見えにくくなってしまったと…」

しばらく沈黙が続く。

その沈黙を神楽がぶち破る。

「銀ちゃん 新八！ 外行こうヨ！」

神楽が立ち上がる。

「へ？」

銀時は死んだような目で見る。

「え？ ああ！いいね！銀さん行きましようよ！」

新八も空気を読んでか、立ち上がる。

「いや 俺はいいから お前ら行ってこいよ」

KYな銀時は足の爪を切り続ける。

「いいからいくアル！」

神楽は強引に銀時を引っ張る。

「ちょ 待つて待つて待つて……痛い！！爪が剥がれ……痛い！待て神楽！行くから！行くから離して！」

万事屋ファミリィは、久しぶりのお出かけ。

大江戸公園。

3人はここに遊びに来た。

「一番乗りアル！」

神楽はまっさきに公園に積もった雪にダイブした。

続いて新八も仰向けでダイブ。

「うわぁ〜雪だ〜！」

銀時はそれを見守る。

「まったく……これぐらいではしゃぎやがって……生意気なこと言うが まだ子どもだ……【バシャッ！】ぶっ！」

ばやく銀時の顔に、雪球が当たった。

「おいテメーら！あんまはしゃぐんじゃねエ！あと俺に雪玉を当てるな！」

「へ？銀さん何言ってますか？」

「私たち ずっとここで寝てたアル！」

「へ？」

銀時が驚いていると、遠くから声がした。

「旦那 すいやせーん」

沖田がズブズブと歩いてきた。

「あー 沖田くんか なに？ 俺ら邪魔？」

「あい 邪魔でさア お楽しみのところすいやせんが チャイナと二人で過ごしたいいでさア」

「なっ！？」

沖田の衝撃と言えば衝撃の告白に、神楽の顔はボツと赤くなる。

「そりゃあ 悪かったな オイ新八 行くぞ」

「ああ 待ってください銀さん！」

神楽と沖田は、沖田の計画通り、二人きりになった。

銀時と新八が去るのを見送った後、神楽が口を開いた。

「ど どうしてこんなところにいたアルか？」

沖田は神楽の顔面に一杯に掴んだ雪を押し当てた。

「むぐっ！！」

神楽はぶるぶると顔を震わせ、手で雪を落とした。

「ぺっぺっ なんてことするアルかアア！」

「最近仕事で疲れてるんでさア ストレス発散」

ム力つと神楽は沖田に逆鱗。

「私をストレス発散の道具に使うなアアア！！ このサド野郎がアアアア！！」

今度は神楽が雪をゼロ距離射撃。

しかし沖田は完全に動きを読んでいるような避け方だった。

「お前の動きは単純で分かりやすいんだよ」

「うがアアアアア!!」

何故か喧嘩勃発。

そのころの銀時たちは。

二人並んで万事屋に向かっていた。

新八は少し落ち気味だった。

「どうした？ 新八？」

「いえ……何でもないです」

「自分よりかなり年下の神楽に先を越されて いささかショックな
んだろ？」

「なんか……あんなに……あんなに堂々と……二人で一緒に過ごし
たい……みたい……」

「羨ましいか？」

「まったく羨ましくねーし！ あんな……あんな昼間からベタベタラブラブ全開な若者見てもなんとも思わねーし！全然羨ましくないね！むしろ失望だよ！沖田さんも神楽ちゃんも若いくせにあんなに………最近の若い者はバカだ！馬鹿！」

「新八……正直に答えろな 焦ってる？」

「あ 焦ってねーしゅ！」

「あ そう それじゃあ お前は一生アイドルの追っかけで生涯を終えそうだな」

「いざとなったら 僕だって普通に毎日仕事をする覚悟はあります！ それにお通ちゃん似の女の子と結婚……「できねーな つーか現実を見る 童貞^{しんぱち}」

「クラアアア！！今なんと書いて新八と読んだアアアア！？？」

とまあ、新八の嫉妬も深く、そのころの神楽と沖田は自然と終戦。そして、あの大きな木の下にいる。

「なんか用アルか？　今日は銀ちゃんたちと遊びたかったのに……」

「そりゃ　悪かったな　でも俺もお前と一緒に居たかったっつーのが事実だしな」

「おお……お前の下手な口説き文句にも　もも……もう慣れたアル……！」

「全然だな」

「正直……迷惑アルヨ……」

「まア　いつも急だからな」

「私も　たまには一緒に居たいと思うアル……けど………いつもタ
イミングが悪いんじゃ　ボケエ……！」

「仕方ねえだろイ」

沖田は俯きながら雪の上に座る。

「何が仕方ないアルかッ！」

「俺だって仕事で疲れてる時だってあるんでさア　癒されたいと思
うときがあるんだよ」

沖田は顔を上げ、神楽に人差し指を向けた。

「神楽ア　お前と居ると　なんでか癒されんだよ」

神楽は固まってしまった。

「ふえ！？」

沖田はスツと立ち上がる。

「神楽 少しだけ我慢してくれ」

そう言って沖田は優しく神楽を抱き寄せる。

神楽は沖田の暖かいツバサに包まれた。

沖田の腕の中で、神楽はしばらく目を閉じていた。

「お前 抱かれるとすぐに静かになるよなア」

沖田がそういうと、神楽はバツと離れる。

「べっ 別にそういうわけじゃないアル！」

すると沖田はくっとならうと笑う。

「お前のそういうところが好きなんだよ 癒されるしな」

神楽は顔を赤くするが、くつと笑い返した。

「私はお前のそういうところが嫌いアル」

二人は見合って笑い、二人して違う方に向かって歩き出した。

「やっぱり俺たちはこれぐらい」

「噛み合わない方が自然アル」

二人は後ろに向かって手を上げる。

「また来週な」

「また明日ネ」

息は合ってるが、本当に噛み合わない二人だった。

（後書き）

どうでしょう……？

まあ、当初は二人でラブラブ～的な感じにしようとしたんですが、そこでハツと我に返り、「こんなの神楽と沖田じゃない！」と本当の二人を徐々に取り戻し始め、中途半端ですが、のようになりました。

ご愛読ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4553f/>

雪のツバサ

2010年10月9日22時13分発行